HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「話す」 と 「書く」 のはざまで ーチャットの活用によるドイツ語授業のインターラクションの活性化-
Author(s)	藤本, 純子
Citation	独語独文学研究年報, 32, 100-114
Issue Date	2005-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26150
Type	departmental bulletin paper
File Information	32_P100-114.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「話す」と「書く」のはざまで
—チャットの活用によるドイツ語授業のインターラクションの活性化—

藤 本 純 子

1．教室内の距離を縮めるツールとしてのチャット

北海道大学言語文化部では、約五年前に九州大学を中心とする日本各地の大学を結んで行なわれた遠隔教育プロジェクトに端を発し、チャットを使った外国語授業が実施されている。残念ながらわずかに英語・ドイツ語各1コマずつという小さな規模であり、実施されていること自体、あまり認知されていないのが実情である。

筆者は2004年春、言語文化部の坂間博助教授が「ドイツ語演習Ⅱ」で実施されているチャットを使用した授業に非公式ながら協力することになった。以来、学期ごとに変わる学生を相手に試行錯誤を重ねるうち、さほど大がかりな機材を必要としないチャットが、学生のみならず非母語話者である日本人教師にとっても、外国語を学習するためのきわめて有効なツールであるという確信を持ちつつある。

「チャット」とは、キーボードからパソコンの画面に入力される文字のみによる会話である。チャットと聞いてまずいちばんに思い浮かべるのは、「遠隔地」とのやりとり、すなわち物理的な距離の克服である。[1] 外国語学習との関連においてもまた、他大学のクラスと結んでの遠隔教育や、対象言語を使用する地域の住人とのやりとりなど、教室空間の「外」と結ぶことがまず話題となる。現に、前述の遠隔教育プロジェクトにおいてもそこに主眼がおかれ、当初は九大と北大のクラスをチャットシステムによってつなぎ、双方の学生の間でチャットが試みられていた。

しかし筆者の関心は、遠く離れた場所とのやりとりよりも、いちばん身近にある教室空間のなかに存在する小さな「距離」をいかにして克服するかにある。[2] 授業の間、空間

---

1 「チャット」はパソコン用語事典では次のように定義されている。
「コンピュータネットワークを通じてリアルタイムに文字ベースの会話を行なうシステム。1対1で行なうものや、同時に多人数が参加して行なうものがある。パソコン通信サービスの機能の一つとして提供されていたが、最近ではIRCなどのようにインターネットを通じて利用できるものもある。」（IT用語事典 e-Words http://e-words.jp/）
「パソコン通信で、リアルタイムに参加者同士が会話を行なえるようにしたサービス。「chat」には「世間話、おしゃべり」という意味がある。 このチャットでは、複数の参加者が同時に会話することが可能で、1人の発言は全員にモニタされる。」（アスキーデジタル用語事典 http://yougo.ascii24.com/）

2 2005年3月、慶応大学日吉校舎における日本独文学会第10回教授法ゼミナールにおいて筆者が行なった口頭発表 <Chat im Deutschunterricht: Förderung der Interaktion von Studenten durch *„sprechendes Schreiben“*> に際しても、教室空間の外にいる相手とではなくあえて同じ教室にいる者どうしでネットを介してチャットを行なうことの利点は特にネイティヴのドイツ語教師には理解されにくかった。

と時間を共有し、互いの姿や声が直接知覚できる距離に身をおいていながら、学生と学生、学生と教師とが直接に言葉を交わす機会は限られており、心理的な距離は小さくない。

チャットは、個と個、個と多数とをネットを介して「直接」むすび、参加者「全員」が「同時」に「文字化」されてゆくやりとりを「視覚的に確認」することを可能にする。実際には、特別なシステムやソフトがなくともネットで数多く提供されているフリーサイトをしようすれば、オンラインの複数のパソコンとワープロ入力程度の技能があれば始められる。

現在まだ授業の実践経験を収集している途上であるが、本稿では、遠距離を克服するためのツールであるチャットを、あえて同一空間内に限定してドイツ語の授業に使用してきたこの二年間弱の授業をもとに、教室内のインターラクションを活性化し、個々の学習者が実際にドイツ語をコミュニケーション手段として「使う」経験を重ねることを可能にするチャットの有用性について、具体的に論じたい。

2．チャットを使用したドイツ語授業の概略

私たちの授業の概略は次の通りである。（本稿では、筆者が関わり始めて以降の授業について扱う。それ以前の授業については、坂間博氏の論文を参照されたい。3 ）

・対象

１～３年生。全学対象の選択科目であり、ドイツ語履修の第二・第三の選択肢。日本人教師のレギュラー授業を履修した上で、さらに興味と余力があれば、母語話者の会話授業や、チャットなどの演習も履修できる形である。

・教室

オンラインの複数のパソコンが設置されている演習室やパソコン室を使用。

・期間・頻度

一学期、週一回９０分

・教材

特に指定しない。履修者各自が手持ちの教科書や参考書、辞書などを参照し、教師のアドバイスや解説などを得ながら作業。

・チャットのテーマ

あらかじめ限定しない。チャットルームに「入室」し、挨拶から始めてドイツ語で雑談（チャット）をかわしてゆく過程で、学生自身の生活や関心事に発したやりとりから、自然にその日のテーマがいくつか出現する。教師もチャットに加わりつつ、チャットの展開に応じて文法や語彙の解説を補い、テーマに即したチャットの進行を助け

---

3 坂間博「チャットシステムを利用した初習外国語指導―インターラクションのあるドイツ語表現演習のケーススタディ」北海道大学国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 59 57-96 2005

る。

・参加人数

特に制限は設けていないが、諸事情により、実際の参加は少人数。4

学生　2004年前期　1年生×2(男2)＝2名

2005年後期　1年生×2(男1、女2)、2年生×2(男2)＝4名

2005年前期　1年生×3(男3)、2年生×2(女2)、3年生×1(男1)＝6名

2005年後期　2年生×3(男1、女2)＝3名

・教師

二人の教師が協力し、状況と流れに応じて仕事を協力・分担しながら進める。一人がチャットに加わっている間、もう一人が口頭で学生に解説や助言を与えたり、板書で文法や単語を整理したりする、など。チャットルームには教師も常に入室し、チャット参加者として適宜加わる。

・チャット人数

ペア、数人ずつ、全員など、組み合わせを変えながら。

・評価

毎時間のチャットは各自のドイツ語力を試す試験状況でもある。定期試験は実施せず、チャットへの貢献度、意思疎通の努力などによって判断（平常点）。

・チャットに使用するシステム

1）2004年前期は、オンライン学習システム „3D-IES“ (3dimensional interactive educational system、かつて北大も参加した遠隔教育プロジェクトのために九州大学大学院言語文化研究院と野村総合研究所が共同開発）を前年度より継続して使用。パソコンのブラウザに三次元の仮想現実空間を出現させ、チャット参加者が各自、画面に登場する自身の代役「アバター」を操りながら、入力画面にメッセージを打ち込んで送信し、画面下方にある数行の表示画面でチャットを展開するというものである。5 ゲーム的な楽しさもあり、数々の魅力的な機能を備えたシステムであるが、ドイツ語でのチャットそのものには必ずしも必要ではない機能も多い。6 しかし、このシステ

4　現カリキュラムでは、開講の時間枠や周知方法などの関係もあり、実際に参加できる学生は限られる。残念ながら、将来的にチャットの授業を増やす方向には向かっていない。

5　遠隔教育システム「3D-IES Ver3.0」については http://www.3d-ies.com/
ならびに http://internet.watch.impress.co.jp/www/article/2001/0205/univ.htm　を参照。

6　3D-IESをドイツ語の授業でチャットに使用するうえでの問題点としては
－ソフトが重く機器への負荷が大きいため、機械的なトラブルが生じやすい。
－アバターの操作にエネルギーが奪われる。アバターの動きに不自然で非現実的な点があり、またアバターの役割設定の幅が狭い（日本人学生の一定年齢層のみ）。仮想現実の表示画面がチャットの表示画面を圧迫し、チャット参加者にはログのごく一部しか見えない。
－仮想現実空間の大道具・小道具に限界があり、異文化理解の点から見て不自然な点が多い。
などがあげられる。画面の仮想現実を現実に近づけようとすればするほど、システムも操作も複雑になり、ドイツ語が背景に退いていくという矛盾をシステム自体がはらんでいると言える。

ムのおかげで、バーチャルなシステムの可能性と限界とを同時に経験する、貴重な機会を得た。

2）2004年後期のはじめにたまたま3D-IESのシステムが機能しなくなり、文字データのみのフリーのチャットサイトで代用したところ、チャットの実施自体には何ら支障がなかった。むしろ、画像がない分チャットの表示スペースにゆとりがあってメッセージとその内容に集中しやすく、パソコンへの負担も軽くて使い勝手がよいなど、利点の方が多かったため、それ以降専らこのサイトを使用している。7

・使用言語

教室の対面状況では日本語を、チャットではドイツ語のみを使用。8

・チャットログ

授業時間内に行なわれたチャットのデータは教師が保存し、見やすく整理・印刷して次回の授業前までに学生に配布する。

3．時間・空間の多重性

3．1．空間の二重性

チャットを用いた私たちのドイツ語の授業では、従来の授業における教室での対面状況と、パソコンの画面とが「やりとり」を行なう場として並存している。

チャット	（従来の）授業
オンライン	オフライン
パソコン画面	（従来の）教室空間
ドイツ語	日本語

このことは同時に、パソコン画面と教室空間とでは質の異なる時間が流れていることも意味する。パソコンの「入力画面」（一行分の入力スペース）に打ち込んだメッセージは、送信が完了してはじめて、全員に見えるチャット画面に表示される。辞書や教科書・参考書などで調べたり、他の学生や教師に質問・相談したりしながら、入力画面で「下書き」を繰り返し、送信を決断して「送信ボタン」を押すまでの間には、かなりの時間が費やされるわけである。

7　このサイトは、チャットを使用した英語の授業を担当しておられる北海道大学言語文化部の教官が多数のフリーのチャットを試用した末に見つけられたものを教えて戴いて使用している。

このサイトも管理者側の事情で機能停止したことがあり、学生の機転によってフリーの「パスワードチャット」の一つでしのいだ。フリーサイトは無料で手軽に使えるのが何よりのメリットだが、フリーゆえの制約やトラブルの多さも意識しておく必要がある。

8　最終回だけは、教師・学生全員が同じチャットルームに入り、日本語で感想や意見を自由に語り合う時間をとる。ドイツ語でチャットをする過程でオープンに語り合う基盤が学生に育っているからでもあろうが、どの学期の最終回も、学生たちがドイツ語とは比較にならない速さで日本語を打ち込み、率直かつ自由に本音を語る様子は印象的である。

送信がない間は、画面は単に静止しているだけで何の変化も起こらない。しかし、評価を伴う授業という状況であることに加え、教室空間ではたがいに画面の前にいる生身の人間が目に入るため、いつまでも放置しておくわけにはいかない。また、時間的なゆとりがあるとは言え、メッセージは「早い者順」に画面に表示されていくため、送信に手間取っていると先を越されてしまい、話の流れが変わってしまっている場合もある。チャットの流れについていくためには、ある程度メッセージが完成した時点で妥協して送信せざるを得ない。このプレッシャーが送信を促し、チャットの推進力としてはたらく。

3．2．時間の圧縮と「流れ」の現出 — チャットログ

チャットと同時進行するかたちで、送信されたメッセージの文字データは、すべてログとして順にネット上に保存されていく。口頭のやりとりでは、録音したものを再生・確認しながら同時に会話も続けていくわけにはとてもいかないが、チャットの場合には、画面に次々と表示されていくメッセージを参照しながらチャットを続けることが可能である。

実際には、メッセージが送信されるまでの間に、試行錯誤に多くの時間が費やされ、発言と発言との間にはかなりの時間が流れていることが多い。しかし、チャットログとして残るのはメッセージのみであるため、教室空間での時間の経過は圧縮されて見えなくなる。つまり、ログの上では「連続性」が生まれ、見た目は普通のスピードで行なわれたひとつながりのチャットの記録と変わらなくなる。この連続性が、ドイツ語である程度まとまったやりとりをなしとげたという、学生の「達成感」につながる。

3．3．メッセージの蓄積

全ての発言が時間順に画面に羅列されてゆくチャットでは、先立つメッセージはすべて、画面に表示されると同時に、新たなメッセージを生産するための「例文集」としての機能を持つようになり、模倣・アレンジして利用される側にまわる。チャットに慣れてくるに従い、学生は同じ表現の反覆を避けたがるようになり、表現に変化を持たせようとし始める。利用できる素材がすでに画面にあるときは、前例をコピー&ペーストしてアレンジする作業も実際によく行われ、その表現や構文を応用した文のヴァリエーションが画面に連続して現われ、その授業時間のポイントの一つを形成していくこともある（たとえば話法の助動詞を使用したメッセージの続出や、副文を使用したメッセージの続出などの現象）。その意味では、教師によるチャット参加と、語彙や文例の提供やメッセージの形を借りた誤りの訂正が、ここでは通常授業の教科書にかわる重要な役割を果たしていると言える。

チャットログは文字データとして取り出して保存し、利用することも可能である。私たちの授業では、保存したデータから入退室に関する「action」情報を削除してメッセージ

のやりとりだけを残したコンパクトな形に直し、後日学生に配布している。[9] チャットログは、補足解説や練習などに使用するほか、授業分析や授業改善用の資料としての使用も可能である。ログの分析については、今後の課題としたいと考えている。

4．文字データと言語化のプレッシャー

チャットの最大の特徴は、「文字データ」のみを介してやりとりが行なわれることである。互いに姿は見えず声も聞こえない。対面コミュニケーションで相手を理解する手がかりとなる非言語的な要素が、チャットではそっくり欠落している。同一空間内でチャットを行なう私たちの授業の場合は、実際には互いの様子が視界に入っている。しかし、ディスプレイ越しに胸の内まで読みとることは難しく、またその余裕もない。事情を知らずに教室に足を踏み入れた人には、互いに無関係な個人がそれぞれにパソコンで作業をしているとしか見えない光景である。

「文字データ」しか頼るものがない状況では、対面状況の会話とは異なり、黙ってうなずいたり、笑ってごまかしたりするわけにはいかない。思考も感情も、記号化・言語化して送信し、画面に表示されてはじめて相手に届く。入力して送らなければ何も起こらないというこのプレッシャーこそ、ドイツ語によるコミュニケーションと実践的運用を学習者から引き出したい私たちにとっては見逃せないチャットの利点である。

チャットでは、ノン・バーバルな情報に頼ることができない分、良好な雰囲気を維持し、不用意な誤解や感情的な摩擦を避けるための意識的な配慮りが必要となる。チャットにおいては、それらもまた全て「言語レベル」に転換して送信しなければ伝わらない。日常生活でいかに非言語情報に依存しているかを意識する好機でもある。場面に応じた挨拶

9　実際のチャットログでは薄いグレーで入退室の「action」も自動的に記録されるが、これが続くと画面が若干見にくくなる。たとえば、ある回の終了直前の画面は

Fujimoto: Vielen Dank fuer die Mitarbeit.
Fujimoto: Auf Wiedersehen!
Furuya: Auf Wiedersehen!
yoshii: Auf Wiedersehen!
Furuya from x.x.x.155 left the chat 44 seconds ago
Sakama: Auf Wiedersehen! Bis naechstes Mal!
yoshii from x.x.x.155 left the chat 37 seconds ago
Furuya from x.x.x.155 left the chat 37 seconds ago
Sakama from x.x.x.155 left the chat 23 seconds ago
Takagi: Auf Wiedersehen!
Fujimoto from x.x.x.155 left the chat

であるが、action の記録を除去すると、下のようになる。

Fujimoto: Vielen Dank fuer die Mitarbeit.
Fujimoto: Auf Wiedersehen!
Furuya: Auf Wiedersehen!
yoshii: Auf Wiedersehen!
Sakama: Auf Wiedersehen! Bis naechstes Mal!
Takagi: Auf Wiedersehen!

や感謝、陳謝、労わりやねぎらいなどの気持ちを、緩衝材・潤滑油として機能する具体的なことばにしてチャットで入力する習慣をつけることは、対面コミュニケーション場面におけるドイツ語運用の実践的な予行演習にもなる。

4．1．論理的関連の意識化

私たちは、ふだん日本語でなにげなく話しているときには、多少具体的な情報を省略しても、聞き手の方で状況や前後関係から補って理解してくれることを無意識裡に期待している。同世代間での会話が多くを占め、生活の自動化が進むなかで育ってきた学生の世代は、ことばを交わさずとも用が足る状況に慣らされているため、ことばを惜しみ、相手に判断を委ねる傾向がさらに強くなっていると考えられる。

しかし、ドイツ語のチャットでは、文字しか使えないという制約に、外国語であるドイツ語を用いるというハンディが加わる。しかもドイツ語では、主語と動詞、指示関係、因果関係、そして時制などを逐一明確にしなければ論理的な関係が不明瞭になる。従って日本語での習慣をチャットの場に持ち込むと「舌たらず」なメッセージになりやすく、理解されなかったり、誤解されたりするもとになる。むしろ、日本語では「理屈っぽい」と感じられるほどに言葉を尽くして初めて、ドイツ語ではちょうどよくなると考えてよい。前後の脈絡から相手の意図をくみとる訓練と並行して、文字情報を正確に読みとり、正確な文字データを発信しなければ、誤解につながってしまうことを実感として経験する場として、チャットを生かすことが可能である。10

10　苦労してドイツ語で発言したのもつかのま、すかさず „Warum?“ „Wieso?“ „Wie meinst du das?“ などと畳みかけられ、とまどっているうちに会話が終わっていた、あるいは、話題を提供したつもりが「それは先のことと何の関係があるのか」「なぜそれを言うのか」「そのことは重要な問題なのか」などと問いただされる — 論理的な整合性を追求する練習もドイツ語運用の学習には欠かせないが、チャットがその実践的なシミュレーションにおおいに活用できるのではなかろうか。互いに論理的関係を具体的に洗い出すことにより、どこを曖昧にしたまま発言していたかに気づき、関連を明確に言語化することを習慣づける訓練が可能になる。

次にあげるのは、まだ仮想三次元空間のシステムを使用していた時期に、１年生２名とともに三人のドイツ人としてチャットを行なった例である。ここで筆者は、あえて理屈っぽく細かく問いただすドイツ人女性を演じることを試みている。

Hans: Hallo,Sabine!
Frank: Guten Morgen, Sabine!
Sabine: Morgen, Hans und Frank! Was macht ihr jetzt?
Hans: Wir sprechen ueber Essen.
Sabine: Aha!
Sabine: Interessant! Ich hab noch nicht gefruehstueckt und habe Hunger.
Hans: Ich habe auch Hunger,weil das Fruehstueck wenig war.
Frank: Ich habe gefruehstueckt, aber ich habe noch Hunger. Morgen Essen ist nicht genu
Frank: Morgen Essen ist nicht genug!
Sabine: Meinst du vielleicht "Fruehstueck"?
Frank: Ja, das meine ich.
Sabine: Und warum habt ihr nicht genug gegessen?
Frank: Es war zu wenig.
Hans: Stehst du spaet auf?
Sabine: Immer? Oder nur heute?

４．１．１．顔文字・記号

学生の多くは日常的にパソコンや携帯電話のメールを使いこなし、顔文字の使用にも慣れているため、ドイツ語のチャットでも、ノン・バーバルな情報を補う手段として顔文字がときおり用いられる。試みに学生たちのメッセージから実例を幾つか拾ってみる：„Guten Tag!!＼(° ▽°)/ " „ Auf Wiedersehen!! (^_^)ノシ" „ Ich bin sehr muede wegen Fussbul spielen (-_-)zzz" など。11 しかし、言語表現を顔文字や記号で代用することに慣れてしまうと、文字メッセージそのものが情報不足になる危険性があり、また多義的な顔文字や記号がかえって理解を妨げるおそれもある。12 したがってこれらは、あくまでも情報を添え、雰囲気をやわらげるための補助手段にとどめておくことが必要である。

Frank: Ich stehe nicht spaet auf.
Sabine: So, so... Und warum kannst du dann nicht genug essen?
Frank: Nur sie gibt mich zu wenig Fruehstueck.
Sabine: Sie? Wer?
Sabine: Deine Freundin?
Frank: Nein, nein.
Sabine: Oh, Entschuldigung. Ich habe dich zu viel gefragt. Und du, Hans?
Sabine: Warum hast du zu wenig gegessen?
Hans: Ich stehe spaet auf.
Sabine: Hast du gestern viel gearbeitet?
Frank: Ich werde Fruehstueck gegeben, von Koeche. Sie wohne in Hause, wo ich wohne.
Sabine: Aha, und sie sind zu faul...
Hans: Nein,ich habe ferngeshen bis spaet.
Sabine: Und deshalb hast zu zu lange geschlafen.
Sabine: Hast du, wollte ich sagen.
Hans: Ja.
Sabine: Wollt ihr ein zweites Fruehstueck essen? Ich kenne ein nettes Cafe.
Sabine: Da kann man auch fruehstuecken.
Frank: Ich bin dafuer.
Sabine: OK. Und du, Hans?
Hans: Ich will viel zu MIttag essen.
Sabine: Du hast recht. Wir muessen sowieso bald zu Mittag essen.

11 以下の例は、学生がチャットにかなり慣れ、顔文字がその学期で初めて登場したときのやりとりである。（なおここでは、横向きの顔文字の存在もとりあげた。）

Kazuya: Satoko, es ist frueh, dass du um 6 Uhr aufstehst. Ich kann nicht so frueh aufstehe.
Satoko: Frauen sind beschaeftigt!(*u*)
Junko: Ja, Frauen haben viel zu tun (^-^)!
Junko: ;-)
Satoko: Wir sind besonder beschaeftigt ,wenn wir jemanden zu lieben haben!(>o<)
Junko: Jemanden.... ???
Satoko: Ah, in meiner Klasse....
Junko: hast du jemanden (? ?)
(中略)
Satoko: Ich habe nicht Geliebten aber ich mag jemanden sehr.
Junko: Schoen! Romantisch....

12 ごく小さな例をあげてみよう。

Shunya from x.x.x.155 joined the chat 8 minutes ago
AKANE: Hall.Mein nane ist ・・・・・・. In Kanji, ・・・. (・・部分は名前)
AKANE: ↑Hallo.

Akane さんは直前のタイプミス„Hall.“を訂正したことを示すために「↑」を使用したようにも、後から入室した Shunya 君に„ Hallo, Shunya. “という代わりに矢印を用いたようにも見える。

５．「誤り」の生産性

チャットが進む過程では、メッセージとともに、タイプミスや文法的な誤りなど、大量の誤りも生産される。一度送信して画面に表示されたメッセージは、後から削除・変更することができないため、誤りもまた、ログの一部としてそのまま記録される。この特性はドイツ語学習にとってはたいへん好都合である。ここでは、チャットを使用した授業における誤りとのつきあいについて考察する。

５．１．文法はコンテクストの中で

チャットでたがいの意思疎通が成功するためには、正確な文字情報を送信し、受信した文字情報を正確に理解する必要があり、そのためには、文法的な正確さが求められる。文字データが頼りであり、全てが目に見えるログとして残るチャットは、文法的に正確な「形」と、伝えるメッセージの「内容」との間にある密接な対応関係を否応なしに意識させられる格好の場である。また、ログによって確認しながらチャットできるため、誤解の原因も見つけ出しやすい。[13]

チャットを用いたドイツ語授業の第一の目標は、まだなじみの薄い初習外国語であるドイツ語を、学生たちが「まがりなりにも」「使いこなし」、ある程度の量の発信と受信を行ない、実践的に「リアルタイムのコミュニケーション」を成立させることである。したがって、多少の誤りが生じても、互いの理解が成立している限りはチャットをしばらくのあいだ流れるにまかせておき、流れが途絶えたころを見計らって、チャットを全員で見直す時間をはさみ、文法的な問題点もあわせて整理するようにしている。チャットがどのように流れて行ったかを点検することによって、些細に見える細部の違いが具体的な「コンテクスト」にどのような影響を及ぼしているかがより理解しやすくなるからである。

５．２．コミュニケーション活動としての誤りの修正

ところで、誤りの訂正は、多くの場合より円滑な意思疎通のために行なわれるコミュニケーション活動の一部である。日常の対面状況においても、言い直したり、相手に問い返したりすることは自然に行なわれている。同じことがチャットでも可能であり、基本的に善意に基づいたやりとりが行なわれる授業内でのチャットにおいては、相互理解をより確かなものにする目的で誤りの修正が行なわれる。また、他者のメッセージを正しく理解しようとする試みは、綴りや構文のチェックを伴うことにもなる。したがって、チャットを使用した授業では、「誤り」の持つ「減点」や「制裁の対象」としての性格は弱められ、

---

13 チャットの当事者の間では意思疎通が順調に進んでいても、実際には互いに同じ誤りを犯したまま、つまり画面に表示されているドイツ語のメッセージとは別の意図でチャットしている場合もある。例えば、現在形の文を用いながら実は両者とも前の週末にしたことについて語り合っていた、など。このような場合には教師がさりげなく介入して誤解を確認・調整する必要がある。

回避し減らすべきものではあっても、恐れるべきものではなくなる。

５．３．自立的・能動的な修正

とは言え、誤りが定着し、新たな誤りを誘発することは避けなければならない。そのためには、誤りを誤りとして明確に意識する必要がある。幸い、チャットデータはログアウトまで画面から消えることはないので、必要に応じてゆっくりと見直すことができる。メッセージの削除や変更はできないかわり、新規にメッセージを追加することはいくらでも可能である。自ら、あるいは他者の質問・指摘によって間違いや誤解などに気がついたときは、そのつど、訂正や言い直し、確認のメッセージを新たに送信すればよい。この過程を繰り返すうちに、自立的・能動的に自他のドイツ語を修正する習慣がついてゆく。14

５．３．１．誤りのリサイクル

学生が苦心して生み出したメッセージには、その場では使い方を誤っているが、文脈や場面が変わればドイツ語文として充分に通用するものも数多く含まれている。これらの「副産物」は、単なる「欠陥品」として捨ててしまうには惜しい。「再利用」できる文脈や状況を具体的に示して「再生」の機会を残しておくことが必要である。15

５．４．教師の介入

誤りの修正に際しては、教師の直接・間接の働きかけが必要であることは言うまでもないが、チャットルームの中では、教師もチャットの一員として、学生と対等の立場に身をおくことになる。しかし、誤りを正すことが習い性となっているため、教師はややもすると「先回り」して「正解を示す」役にまわり、チャットのなかでもやはり教師役を演じてしまいがちである。その結果、学生の発言の意図や文脈を充分に把握しないうちに修正やアドバイスのメッセージを送信して、かえって学生を混乱させたり、チャットの流れを乱したりしてしまうことにもなる。チャットの伴走者として、チャットのテンポが落ちぬよう、自らメッセージを送信しながら流れを調整することと、チャットのなかで、学生自

14　ただし、訂正後の再送信や未完成のメッセージの送信はいけないのではないかという意識が働くため、修正・追加メッセージを後から送信することが学生の間に定着するまでには、しばらく時間を要する。

入力画面に未送信の文を置いたまま躊躇している学生には助言を与えることもあるが、多くの場合、試しに送信して相手の反応を見るように促すことにしている。そこからやりとりが活気づくことの方が多いからである。

15　実際に授業で現われた例を幾つかあげてみよう（右の文が本来の意図）。

„Ich bin nicht gut/schlecht." — Mir geht es gut/schlecht.

„Ist das sicher?" — Bist du OK? Geht es dir gut? （風邪をおして授業に来ている相手に。）

„Heilst du die Erkaeltung?" —Bist du wieder gesund? （風邪を引いていた相手に。）

„Hast du die Nanbokulinie eingestiegen?" — Bist du mit der Nanbokulinie gefahren? （「乗る」の多義性から「（乗り物で）移動する」と「（乗り物に）乗車する」を混同）

身の「気づき」や自力による修正を促しながら「待つ」こととのバランスをはかることは容易ではない。16

ここで、いったんチャットの流れから距離をとって客観的な視点を取り戻し、文法や語彙を整理するための手段として忘れてはならないのが、いわゆる「従来の」授業空間および授業方法である。パソコンから離れてメディアを切り替え、板書および口頭による整理・解説や、手書きによる整理・練習などのなじんだ方法をさしはさみ、ふだんの教師と学生の役割に戻ることによって、ある種の安心感を得られると同時に、より冷静にチャットの流れを見直すこともできるようになるからである。

６．自分自身について書く（話す）

チャットで語りあう内容については、あらかじめ材料や課題を準備しておくなど、さまざまな方法が考えられるが、私たちの授業では、各時間にとりあげるテーマや文法項目を決めておくことをあえてせず、その日のチャットの展開に委ねる方式をとっている。つまり、そのときどきの学生たちのチャットから、その時間の中心をなす話題やそれにともなう語彙や構文、注意して扱うべき文法項目などがおのずと絞られてくる。学生たち自身の現実、学生たちが「いま／ここで」「話したい／聞きたいこと」がその日のチャットのきっかけをつくり、授業の流れを決定する。何が出現するか予測が立たないという不安もあるが、予想外の話題や事実の出現、そして展開という楽しみが得られる。17

６．１．脱匿名性・脱擬似コミュニケーション

同じ教室にいる者どうしのチャットでは、互いに面が割れているため、チャットの特性の一つである匿名性ははじめから失われている。いわば、最初から「オフ会」の状態でチャットをしているようなものである。それでいて、たがいに率直に語ることができ、退屈することもない。これは、「話す」作業を「書く」という時間的にゆとりのある作業で代用できることはもちろん、同じ空間にいながら各自がパソコンに向かっており、ネットというフィルターの介在が直に話をする際の心理的なハードルを取り払ってくれるという、

16　チャットルーム内における教師からの修正については、現在も試行錯誤が続いている。たとえば、学生の誤りや語彙の注釈などに直接関わる発言は括弧に入れ、チャットの流れを阻害しないように試みたりするなど。括弧を用いると教科書的説明による「教師的」な介入は行ないやすい。しかし括弧の頻度が高くなると、チャット本来の会話と「(　)」内のやりとりが混線することもある。次にあげる例では、Ｌ１がいわゆる教師的な直接訂正の例であり、Ｌ２がチャットの発言を装った間接的な訂正である。

S: Ich habe mich erkalte.
L1: Du hast dich erkaeltet, S? Das tut mir leid.
L2: (S-san, auf Deutsch sagt man „Ich habe mich erkaeltet. " oder „Ich bin erkaeltet." OK?)

17　話題を限定してチャットを試みたことが何度かあるが、決められた枠の中では話が展開させにくく、ある程度知っている者同士の場合は話が途中で続かなくなり、学生が退屈してしまう例も見られた。学生からも「最初からテーマを決められると話がしにくい」という声が出た。

チャット本来の特性が確保されていることによるところが大きい。また、不如意なドイツ語を使うというハンディにもかかわらず、個人と個人、個人と全員が、チャットというツールを介して直接プライベートな会話を交わすことができるという要素によって、ドイツ語を使うこと自体に、一種のゲーム的な要素が加わる。18

自分についての事実を語らねばならないというルールを設けているわけではないにもかかわらず、学生たちは申し合わせたように、それぞれの事実や考えをドイツ語で忠実に表現しようと四苦八苦する。誰でも自分自身について語り、相手のことをよりよく知りたいという欲求があると同時に、自分たちの身近なところに話題を求めるのが材料も見つけやすく、また具体的な情報を持っているために、話も展開させやすい。

しかし、市販の多くの外国語教材を見てもわかるように、外国語学習については「虚構のロールプレイの方が学習者にとって心理的なハードルが低い。創作は楽しい作業である。」という根強い思い込みがあるようである。三次元仮想現実空間を用いたオンライン学習システムもまた例外ではない。だが、虚構の役割を外国語で演じる作業はかなりの労力を要する。自分が演じる人物について、整合性あるフィクションを構築する能力に加え、それを矛盾なくドイツ語で演じるための語彙と表現力が要求されるからである。虚構の人物に感情移入できなければ、発言に責任と一貫性は持たせにくい。さらに、遠隔教育システムを用いてチャットを行なっていたときの経験から言えば、ドイツ語圏にある実在の町を舞台とした状況設定やそこでのシミュレーションも、未知の異文化について虚構を創り出すだけの予備知識をまだ持ち合わせていない学生にとってはあまり意味がないばかりか、ともすれば注意がそちらに行ってしまい、ドイツ語自体に注ぐエネルギーが奪いとられてしまう可能性もある。19

6．2．インターラクションの活性化 ― 共同作業としてのチャット

チャットは、個人作業であると同時に、集団作業でもある。メッセージを作成して入力・送信するのは個人だが、チャットの流れを作っていくのは、チャットルームの入室者全員である。チャットの回数を重ねるにしたがい、チャットルームにも教室にもしだいに

18　2004年の夏に、北海道大学の言語文化部でチャットを使用した英語の授業を見学する機会があった。そこでは、九州大学と北海道大学の教室をつないでのチャットが今も実施されており、見学した日は前期の最終回でもあったため、学生たちが最後にチャットで授業の感想を語り合う時間があった。印象に残ったのは、両大学の複数の学生から、顔が見えずハンドルネームでしか互いを知らないため「誰と話しているのか、最後までわからなかった」「さみしかった」という声や、個人的に相手のことをもっと知りたかったという要望が出ていたことである。文字を介しての情報は入ってくるが、相手の正体をついに具体的に把握することが叶わなかったことに対するもどかしさの表われではなかろうか。人と人とが直接顔を合わせて言葉をかわす「対面コミュニケーション」の重要性を再認識させられた。

19　事実、仮想現実空間で「ローテンブルク」の町を歩いていながら、実際に学生たちがかわしていたチャットの内容は、昼にラーメンか寿司を食べにいく相談であったこともある。つまり、一見ドイツらしい舞台は、ドイツ語でのやりとりにとってはほとんど無意味であったことになる。

チャットの成立のために協調・協力しあう空気が生まれ、学ぶ仲間としての連帯感が育ってくる。20 こうして授業は、年齢や立場、学年や専門領域などを異にする者どうしが、ドイツ語の学習を介して交流する場となっていく。21 siezen で始まったやりとりは次第に duzen に移行し、やがて教師を含む全員がチャットルームでは互いに Vorname で呼びあう仲になる。そして、チャットルームで育つ親近感に導かれるようにして、教室の対面状況での距離も縮まっていく。教師と学生が、対面状況では互いに教師と学生として接し(「先生」)、チャットルームでは Vorname で duzen しあうという二重性にも、教室(パソコンの外)とチャットとルーム(パソコンの中)が、互いに侵犯しない二つの空間であるという暗黙のルールが成立している限り、不都合はない。22

7. 文法訳読・独訳と実践的運用の橋渡し

非ネイティブである日本語教師は、ドイツ語の運用面においては、どうしてもネイティブにひけをとらざるをえない。しかし、以上のような特性をもつチャットを授業に活用すれば、それほど負担を増やすことなしに、ドイツ語の実践的な運用能力を育てるためのコミュニケーション中心の授業を行なうことが可能である。

また学生にとっても、日本人教師の文法訳読や独訳が中心を占める授業と、ネイティヴスピーカーの実践的な運用が中心の授業との間にある大きなギャップを埋める「中間段階」の授業として、チャットを用いた授業が担うことのできる役割は大きいのではないかと思う。通常の授業に部分的に取り入れるだけでも、またパソコンを使用しない授業場面においても発想を応用し、紙とペンによるドイツ語のメッセージの発信の機会を増やすだけでも、ドイツ語による(虚構に対して)真のコミュニケーション場面を教室空間に作り出すことができるという意味で、チャットが示唆するものは多い。

繰り返しになるが、チャットを使用したドイツ語学習の利点は、ドイツ語での即答を迫られることなく、時間的ゆとりをもって充分に試行錯誤しながら、相当量のドイツ語の

---

20 このような関係を、九州大の岡野進氏は「学びの共同体」とよび、坂間博氏は、「チュートリアル」なつながりによって結ばれる学びの「コミュニティ」という表現を用いて表わしている。詳しくは両氏の論文を参照。

21 2005年度前期は、1年生3名、2年生2名、3年生1名というバランスのよい構成であった。1年生はレギュラークラスでドイツ語を学習し始めたばかりであったが、2・3年生が使う未知の構文や語彙にも見よう見まねで次々と挑戦し、チャットに積極的に加わった。学期半ばには既習事項をかなり忘れている先輩たちが押され気味になるという逆転現象も見られ、1年生3名は前期のうちに、過去形・現在完了形、話法の助動詞、副文などの基本はマスターしていた。

22 ただし、参加者の個人的特性や私生活も前面に出て来やすいこの授業は、脱線すなわちカフェ化の危険性とも隣り合わせである。ドイツ語であれば「私語」も個人的な話題も許されるため、チャットにはさまざまな話題がとび出し、ときおり笑いも起こって終始なごやかな雰囲気であることが多い。しかし、一定のルールを設定しておかなければ、チャットが教室空間に進出し、教室が日本語の私語がとびかう空間に変貌し、ドイツ語が二の次になってしまう可能性がある。

文を産出し、生身の相手と実際にやりとりをしながら、実践的にコミュニケーションの道具としてドイツ語を使ってみることができるという点にある。

日本人の学生にとってメリットとなるチャットの諸特性はまた、日本人の教師にとってのメリットをも意味する。第一に、ドイツ語のみのチャットを使用することによって、教室内でのコミュニケーション言語としての日本語の使用を制限することなく、通常の授業よりも多量のドイツ語の実例を、チャットの中で学生に実践的に実演して見せることが可能になる。また第二に、教師自身にも考えたり調べたりするゆとりが与えられる。口頭で同じことが授業で可能かどうかを考えてみれば、負担の軽さは一目瞭然である。

8．むすび

パソコンはあくまでも道具、すなわち従であり、人間が交わすチャットの中身が主である。使う道具は単純で使いやすいものであるほど、ドイツ語の内容と作業そのものに集中できる。今どきの大学生であれば当然パソコンも使いこなせるはずという漠然としたイメージがあるが、現実は決してそうではない。学生にとっても教師にとっても、パソコンの操作が必要以上の負担となり、授業や学習の阻害要因になってはならない。

筆者は、CALL が理想的な外国語学習のシステムであるかのように語られ、実のところは人員削減の口実として導入されようとしている現在の一部の流れに対しては、危機感を抱いている。外国語教育にとって、生身の人間でなければできないことと、大がかりなシステムなしでは実現不可能なことを峻別し、システムの導入によって、本来は授業活動そのものや個々の学習者にふりむけられるべき教師の能力やエネルギーが、機械の面倒を見ることに奪いとられてしまうことはないか、冷静に考えるべきときであると思う。

私見によれば、購入と維持と設定に膨大な費用と人手を要し、何年か後には巨大なゴミと化すであろう複雑な設備は必ずしも必要ではない。複数のオンラインに接続されたパソコンがあれば実施可能なチャットを部分的にでも取り入れることによって、経費を教員養成、つまり人間を育てることに向けることも可能なのではないかと考える。

さまざまな利点を持つチャットの授業における活用だが、大人数クラスでの授業には向かない。大人数では個別のやりとりに目が届かなくなり、授業の質が低下することは必至だからである。理想は「教師は多め、学生は少なめ」である。むろん「チームティーチング」や「ティーチング・アシスタント」の投入が制度的により容易になれば、クラスサイズに関してはその限りではない。複数の教師とＴＡの協働によって、中サイズのクラスでチャットを行なうことは充分に考えられる。しかし、ドイツ語の授業や教師が減らされ、万事が省力化にむかう現状下では、チャットを用いた授業が正規のカリキュラムの枠内で通常授業としての位置を占めることはほとんど非現実的にすら思われる。だが、たとえ小さな規模ではあっても、チャットを使用した授業を実践し、可能性を探っていきたい。

参考文献

・岡野進「外国語教育と３次元仮想空間」『独仏文学研究』第 50 号 61-68 2000

・岡野 進「対面授業を越えて」九州大学大学院　言語文化研究院
『大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト研究成果報告書』53-64 2002

・岡田朋之・松田美佐編「ケータイ学入門　メディア・コミュニケーションから
読み解く現代社会」有斐閣　2002

・斎藤兆史「日本人に一番合った英語学習法」祥伝社　2003

・坂間博「チャットシステムを利用した初習外国語指導 ―インターラクションの
あるドイツ語表現演習のケーススタディ」
北海道大学国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 59　57－96 2005

・杉本卓・朝尾幸次郎「インターネットを活かした英語教育」2002

・D.A. ノーマン　佐伯胖監訳岡本明・八木大彦・藤田克彦・島田敦夫訳
「人を賢くする道具　ソフト・テクノロジーの心理学」新曜社　1996

・堀田龍也「メディアとのつきあい方学習　「情報」と共に生きる子どもたちの
ために」ジャストシステム 2004

・室田尚子「チャット恋愛学」PHP 研究所　2005

・吉島茂／境一三「ドイツ語教授法　科学的基盤作りと実践に向けての課題」
三修社　2003

・吉田研作・柳瀬和明「日本語を活かした英語授業のすすめ」大修館書店
2003

・Johannes Bittner : Digitalitaet, Sprache, Kommunikation
Erich Schmidt Verlag 2003

・Detlev Schoettker (Hg.)　Mediengebrauch und Erfahrungswandel
Vandenhoeck & Ruprecht 2003

（北海道大学 文学部助手）